イストワール

ｍｅｙｕｕ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イストワール

【Ｎコード】
Ｎ３４４７Ｉ

【作者名】
ｍｅｙｕｕ

【あらすじ】
突然の両親の死。
高校を中退し、ホストへなった優羽。
そこで出会った先輩ハル。
運命の女性との出会い。
優羽の数年間の物語。

～優羽～初デート～

チュンチュン。
鳥の鳴き声がかすかに聞こえ、カーテンの隙間から日がさしていた。
優羽は目を覚ました。時計を見ると7時を回る頃だった。
今日は希美と会う日。一週間前に約束してから、今日の日をどれほど待ちわびただろうか。
希美とは１０時に駅前のカフェで待ち合わせをしている。
まだまだ時間がある。もう少し眠ろうかと目を閉じる優羽。
が、眠れない！
それはそうだろう。大好きな子に会うのだから、緊張と興奮で完全に目が覚めていた。
少し早いが起きようとベットから出る優羽。
そしてバスルームへ行き、シャワーを浴びた。いつもよりもボディソープをたくさんつけ、念入りに洗った。
シャワーを浴び終え洗面台で歯を磨いた。歯もいつもより5分ぐらい長く磨いた。
そして髪を乾かし、ワックスをつけた。

優羽の髪は以前よりも少し伸びていた。
うっすら赤毛の柔らかいくせっ毛だ。
「よし！」
それから、香水を手に取った。
「ん～どうしよっかな…」香水を付けようかどうか迷う優羽。
もしかしたら、希美はあまり香水が好きじゃないかもしれない。
「今日は止めとこう」香水を置いた。
いつもは香水を付ける優羽。なので、いつもいい香りを漂わせていた。
たまにハルのをこっそり使う時もあった。
ハルにはバレてはいるが。
優羽は部屋へ戻り、クローゼットを開けた。
もっている洋服を出す。
優羽はいつもスーツの為、あまり普段着を持っていなかった。
だか、持っているものはすべてブランドのおしゃれな物ばかりだった。
「ん～」今度はどの服を着ようか悩む優羽。
「これとこれは？」　鏡で合わせてみた。
「違うな」何かが違かったらしい。

「これはどうだ？」また鏡に合わせた。

「これも違うな」また何か違うらしい。

独り言の多い優羽。

一人暮らしが長いと、独り言が多くなったり、テレビにつっこみを入れたりするらしい。

数分後。

「うんうん。これがいい。」やっと決まったらしい。

濃い色のジーンズにベージュと紺色のボーダーのシャツを着た。そして、紺色のニット帽。シンプルな服に決めた。

優羽のセンスは抜群だった。

優羽は時計を見た。

８時４０分。

「もうこんな時間か。」支度にずいぶん時間がかかってしまった。

優羽のマンションから約束のカフェまでは車をとばして３０分で到着するが、優羽は希美に会う前に寄りたい所があった。

それに、希美よりも早く到着していたかった。

「行ってきます。」

優羽は両親の写真を見ながら言った。

写真の中の父と母。

背がすらっと高く、鼻筋が通り薄い唇と軽いくせっ毛は父親に似ている。奥二重で優しい目、人一倍思いやりがある所は母親に似ていた。

優羽は茶色いチェックのパーカーを羽織って、家を出ていった。

季節は冬。１２月に突入した頃だった。
外は日に日に寒さを増していった。

優羽はマンションの駐車場へ行き車に乗り込んだ。車の免許はいち早く取得していた。
この車は、優羽が１８歳の誕生日の時にハルがプレゼントしてくれたものだ。だれもがうらやむベンツ。
誕生日にいきなり自宅に届いた。ハルにすぐ連絡をした所、男はベンツだと何だか良く分からない事を言っていた。

優羽は休みの日はいつもこの車でドライブをしていた。運転にも自信があった。

「さて、しゅっぱ～つ」とまた独り言を言い、車を発車させた。

車を走らせ到着した場所は花屋だった。

「ん～」優羽はたくさんある花の中から何がいいか悩んでいた。

「やっぱりこれが一番綺麗だよなぁ・・」と桃色のバラを見ていた。

すると、定員が話しかけてきた。

「贈り物ですか？」

「あ、はい。そうなんです。」優羽が答えた。

「女性への送りものでしたら、やはりバラが一番人気ですよ」と店員が教えてくれた。

「ふぅ～ん。そうなんだ。じゃぁ、それ包んで下さい」

綺麗に包んでもらい、優羽は車に戻った。バラの良い香りがした。

また車を走らせ、近くの駐車場に車をとめ、約束のカフェへと入って行った。中は広々としていて、すべて茶色で統一されていた。最近出来たばかりのようだった。

優羽は店員に案内され席へ座った。時計を見ると９時４０分。少し早めに着き安心した優羽。

「あの～」ＯＬ風の二人が話しかけてきた。

「はい？」優羽は返事をした。

「モデルさんとかですか？」二人は優羽の事を上から下まで穴があく程みている。

「いえ、違いますが。」優羽は否定した。

「え？違うんですか？てっきり何かの撮影やるのかと思いました。あはは」と二人は目を合わせて恥ずかしそうに笑っていた。

優羽も照れながら笑い返した。

「安積くん？」
振り返ると希美がいた。
希美は薄紫色のニットのワンピースを着ていた。フードからは白いホワホワしたボンボンが垂れていた。それに黒のタイツを履き、ブーツを履いていた。

希美らしいかわいい服装だった。

「あ、希美さん。早かったね」優羽は思わず立ち上がった。

「安積くんこそ。あの…知り合い？」希美はＯＬ風の女性二人と優羽を交互に見て言った。

「あ～いえいえ、すいません失礼しました～」　と二人は言って去っていった。
優羽の事をモデルと思い、何かの撮影が行われると勘違いした二人だった。

「ごめんね。気にしないで。さぁ、座って」とイスを引く優羽。

「うん、ありがとう」笑顔で答える希美。

希美の笑顔を見て、優羽も自然と笑顔がこぼれた。

「希美さん、これ」優羽は花束を希美に渡した。
「わぁ～これ私に？」とびっくりしながら聞く希美。

「うん、希美さんに似合うと思って」優羽が答えた。

「嬉しい、安積くんありがとう。わぁ、素敵なバラ、いいにおい。」
希美はすごく喜んだ。
優羽は嬉しくなった。
「希美さん、会いたかった」希美の笑顔を見て、つい言葉がこぼれてしまった優羽。
「安積くん・・・私も。」
お互い見つめ合った。そして笑った。
「あ、そうだ！希美さんこの前メールくれたでしょ？あれ仕事用のだから、俺の携帯教えるよ」
と携帯を取り出す優羽。
「うんっ！」嬉しそうに希美も携帯を取り出した。
「そおいえば、希美さんは名字何？」番号を教えながら聞く優羽。
「黒川だよ」希美が教えてくれた。
「黒川か。分かったよ」と優羽が言った。
携帯番号とアドレスを交換した二人。
「これでいつでも連絡とれるね」優羽が言った。希美も嬉しそうにうなずいた。
「安積くんって、私が思ってたのと全然違ってた」と希美が言った。
「ん？」と聞く優羽。

「だって、高校の時は安積くん頭が良くて、かっこ良くて、モテモテだったけど、あんまり女の子に興味ないって感じだったよね。あと、無口なイメージだったの。」

「あはは、そうだったんだね。」優羽は希美にそんな風に思われていた事がわずかにショックだった。

「でも、ホストクラブでお話しした時もそうだし、今も、本当はおしゃべりだったんだね安積くんは。それに、すごく性格もおっとりしてたんだね」希美は笑いながら言った。

「女の子に興味がなかった訳じゃないけど、ただ好きになる子がいなかっただけだよ。それに、高校の時は確かに無口だったかも。でも、今は希美さんといると、楽しくてしゃべっちゃうみたい」と優羽は希美の事を見ながら言った。

希美はニッコリ笑った。

希美の笑顔を見た優羽は、また嬉しくなった。

「何か飲みもの頼もうか？」と優羽が希美に訪ねた。

「うん。私は紅茶がいい。」と希美が答えた。

「すいません、紅茶二つ下さい」優羽は近くにいた店員に頼んだ。

すぐに紅茶が運ばれてきた。

「希美さん、砂糖いくつ入れる？」と優羽は砂糖が入った瓶を開けた。

「一つでいいよ」と希美が答える。
優羽は、茶色と白の丸い砂糖の中から、白い砂糖を一つ希美のティーカップに入れた。
「ありがとう」希美が言った。
優羽は自分のティーカップに、茶色と白を一つずつ入れた。
「おいしいね」紅茶を飲みながら優羽が言った。希美と飲む紅茶はとてもおいしく、優しい味がした。
「安積くんって気が利くね。やっぱりお仕事の関係かな？」希美が優羽に聞いた。
「え？俺気が利くかな？」女性をエスコートするのは当たり前と思っていたので、気が利くと言われて驚いた優羽。
「うん。だって、何でも自然にやってくれてるよ。あまり同年代の子ではいないかも。」希美が言った。
「そうなんだ。もしかしたら、先輩に厳しくしつけられたからかも。」と優羽は苦笑いした。
「安積くんの先輩は怖いの？」と希美が訪ねる。
「ん～そうだね。怖いと言えば怖いかな。」と優羽は答えた。
「どうゆう風に怖いの？」また希美が訪ねた。
「先輩の言った事を聞かなかったりすると、長々と説教されるよ。あ、この前は、先輩の部屋を掃除しとけって言われたんだけど、夕

方まで寝ちゃった時があって、その時はボコボコにされたよ。顔以外だけど。」優羽は笑いながら話した。

「厳しい先輩なのね」と優羽の事を切ない目で見ながら希美が言った。

以前、ハルのお気に入りのＡＶを勝手に見て、出しっぱなしにした時もかなり怒られたが、その事は希美に言うのは止めた。

「厳しいけど、頼りになる先輩だよ。すごい尊敬してる。」と優羽は言った。

希美は優羽を見て微笑んだ。

それから、ずいぶんと話しがはずんだ。二人はお互いの事をたくさん話した。お互いの情報をしっかりと頭に記憶した。

「そろそろここ出ようか？希美さんお手洗いは？」優羽が話しを切り出した。

「うん、それじゃ、ちょっと行ってくるね」と席を立ちお手洗いへ希美は行った。

「すいません、会計」と優羽は近くにいる店員を呼び、会計を済ませた。

すぐに希美が戻ってきた。「お待たせ」

「じゃ、行こっか」優羽は席をたった。

希美が桃色のバラを持ち優羽を見て微笑んだ。

「似合うよ」バラも綺麗だが、希美の方が綺麗だと思った優羽。
店を出る時に、希美がお会計はと言ったが、もう済んでる事を伝えたら、驚いていた。
「近くに車止めてあるんだ」優羽が希美に言った。
二人は優羽の車へと向かった。
「あの、お兄さん、ちょっといいですか？」いきなり３０代ぐらいの男に声をかけられた。
「何？」優羽は歩きながら答えた。
「僕、今スカウトしてるんですけど、お兄さんホストクラブとか興味ない？お兄さんならナンバーワンになれるよ。」男は優羽にピッタリマークしながら話した。
「いえ、すいません。結構です。」優羽はハッキリ言った。
他にもホストにならないかと声をかけてきた人が２人いたが、すべて丁寧に断った。
「もうホストなのにね」希美は笑いながら言った。
「そうだね」
優羽も笑った。
「あの～、すいません！ちょっ、ちょっといいですか？」また中年男性が話しかけてきて、二人の前に立ちはだかった。
二人は立ち止まった。

「君！今時間あるかな？少し話しがしたいんだけど」と優羽の方を見て言う中年男性。

「すいません、時間ありません」と希美の手を引いて歩きだそうとした優羽。

「分かった！じゃぁ、時間ないならここでいいよ。君、何か芸能活動してる？」歩きだそうとした優羽をまた引き留めた。

「してませんけど」優羽は少しうっとうしそうに言った。

「じゃぁさ、うちの事務所に入らない？君、絶対アイドルになれるよ」

と目を輝かせながら言う中年男性。

「いえ、興味ないんで．．．」と言い歩きだそうとした優羽。

中年男性は引かなかった。

「じゃぁ、連絡先だけでも教えてほしいんだ」

「いえ、教えられませんので」優羽が言う。

中年男性はしつこく優羽を自分の事務所に入れようとした。

「希美さん、ちょっとここで待ってて」と優羽は希美に言った。

希美はうなずいた。

「ちょっとこっちへいいですか？」優羽は中年男性を道のはしっこへと呼んだ。中年男性はやった！とゆう顔をしている。

優羽は希美に聞こえない位置まで確認してから、中年男性に言った。

～優羽～初デート～

「お前さ、今女連れなんだよ！状況みて話しかけろよ！次話しかけてきたらぶっ殺すからな」
優羽は中年男性を脅した。
中年男性はビビっていた。
優羽は希美の所へ戻った。
「希美さん、お待たせ。行こっか」
「あれ？話しすんだの？」希美が聞いた。
「うん、丁寧にお断りしたよ」優羽は嘘を言った。
「そう」
希美は少し不思議そうだった。
優羽の車に到着した。
「さぁ、乗って」助手席のドアを開けながら優羽が言った。
「うん、ありがとう」希美は車の種類などは良く分からないようだ。
自分がベンツに乗った事さえ気づいていない。
助手席のドアを閉め、優羽も運転席へと乗り込んだ。
「安積くん、車乗れるんだね。すごい」希美は優羽の事をマジシャンか何かを見るような目で見ていた。
「え？すごいの？」優羽はただ車を運転するだけなのに何がすごいのか分からなかった。

「だって、私達の年で免許持ってる人ってあんまりいないよ。」と希美が言った。

「そうなんだ。知らなかったよ」やはり優羽は普通の１８歳とは違っていた。ましてや、乗ってる車はベンツ。希美には分からないが。

「希美さん、駅の向こう側に新しくショッピングモールできたの知ってる？」優羽は希美に聞いた。

「うん、知ってるよ！でも、まだ行った事ない」希美が言った。

「じゃ、そこ行こうか。俺、行って見たかったんだ」無邪気に優羽が言った。

「うん、行こう」希美も賛成だった。

優羽はショッピングモール目指して、車を発車させた。
車内はバラの香りが漂いここち良かった。

「それにしても、カフェから車までそんなに距離ないのに、安積くんたくさん声かけられたね」希美が話しだした。

「うん…何かごめんね。嫌な気分にならなかった？」優羽は希美を嫌な気分にさせてないか心配になった。

「私は平気だよ。やっぱり安積くんって誰からみてもかっこいいんだね」と希美が優羽の事を褒めた。

「そ、そんな事ないよ」優羽は照れた。

「安積くんって、何でそんなに肌きれいなの？ちょっと触っちゃお」と希美が優羽の頬をつんつんした。

ますます優羽は照れた。

「毎週エステに行ってるからかな」優羽は照れながら答えた。

「毎週？！」希美は驚いた。

「うん、先輩に行けって言われてるから…あっ、そうそう、随分前なんだけど、顔にニキビが出来た時があってその時は店に出させてくれなかったんだ。俺がそんな顔で接客してたら、先輩が恥かくからって」優羽が話した。

「それで毎週エステに行ってるのかぁ。すごいな私、エステなんて一度も行った事ないや」

希美が恥ずかしそうに言った。

だがこの年でエステに行ったことがないなんて全然普通である。

「希美さんはそんな所行かなくても十分綺麗だよ」言った後に恥ずかしくなった優羽。でも本心だった。

希美は頬を赤くして、下を向いた。

そうこうしてるうちにショッピングモールへ到着した。

「着いたよ」優羽は駐車場に車を止めた。

「わぁ、こんなに広いんだ」希美はショッピングモールを見渡して言った。

二人は車から降り、ショッピングモール内へ入って行った。

中は新しい建物の匂いがし、縦長に広々としていた。休日のせいかたくさんの人でにぎわっていた。壁はガラス張りで外の景色が見渡せた。

二人は目につく店に入り、お互いに服を合わせたり、アクセサリーをみたり、とても仲の良いカップルに見えた。

「希美さん、ピアスは開いてるの？」優羽が希美に聞いた。

「開いてないの」希美が髪を耳にかけ、優羽に見せた。

「安積君はピアスしてる方が好き？」希美が優羽に聞いた。

「ん～どっちも好きだけど、希美さんピアス似合うと思うよ」優羽が言った。

「ふふ、そう。」希美が嬉しそうに言った。

「安積くんも似合ってるよ」希美が優羽の耳を見ながら言った。

優羽は右耳にピアスをしていた。耳タブではなくもっと上の方にピアスの穴を開けていた。

ハルの真似をして、同じ所に開けたのだ。

「ありがとう」優羽は嬉しかった。

「希美さん、少し休憩しようか。」優羽は希美を気遣い言った。

「うん、そうしよ」希美が言った。

二人はレストラン街へ行った。

「安積くんこれすごいよ」希美が指指しながらいった。
見ると、かわいらしいトラックがあり、その中には肉の固まりのような物が回っていた。
前のガラスケースには野菜類が並べられていた。どうやら、サンドウィッチ屋さんらしい。
たくさんのメニューが飾られていた。注文してから作ってくれるようだ。
「わぁ、なんか外国っぽいね」優羽もびっくりしながら言った。
「安積くん、これ食べようよ」希美がわくわくしながら言った。
「うん、希美さんどれがいい？」メニュー表を見ながら優羽が言った。
「ん～迷うなぁ・・じゃぁ、これ！」希美はアボカドの入ったサンドウィッチにした。
「安積くんは？」希美が聞いた。
「ん～ホント迷うね。これがいいかな。」優羽はお肉のサンドウィッチにした。優羽は肉が大好きだ。
「俺、買ってくるから、希美さんあそこに座っててて」優羽が開いてる席を指さした。
「うん、じゃぁお金・・」と財布を取りだそうとする希美。

「いいから、座ってて」と希美を席に座らせた。
優羽はアボカドサンドと肉サンドとウーロン茶を二つ買った。
「おまたせ、はいどうぞ」席に着きながら優羽が言った。
「ありがとう」希美がお礼を言った。
二人はまたおしゃべりしながら楽しい時間を過ごした。
優羽は希美としゃべる時楽しくてしかたがなかった。希美もそうだった。
「希美さん、ここペットショップがあるみたいだよ。行ってみよう」
優羽が希美に聞いた。
「うん、行こう」希美も行きたがった。
ペットショップに入るとケージの中に子犬や子猫がボールで遊んでたり、眠っていたりした。
「かわいいなぁ。ね！希美さん」優羽の目はキラキラ輝いていた。
「……」希美は笑いをこらえてるようだった。
「希美さん？」優羽が聞いた。
「安積くん、動物好きなんだね。もう、目が輝いてるよ」希美が笑いながら言った。優羽が動物が好きなのが以外だったらしい。
「あはは、俺動物好きなんだ」優羽は照れながら答えた。
「ねぇ、希美さん、あっち行こう！子猫触れるみたい！」優羽は子

供のようになっていた。

優羽と希美は子猫とふれ合えるコーナーへ行った。

「やばい。かわいい。ちっちゃい」優羽が子猫を抱っこしながら言った。

「アメリカンショートヘアだね」希美は優羽が抱っこしてる子猫の鼻をさわりながら言った。

二人はペットショップを満喫した。特に優羽が。

「やっぱり動物かわいいな」車に戻りながら優羽が言った。

「安積くんが動物好きだったなんて」と言いながら笑う希美。よっぽど以外だったらしい。

希美につられ優羽も笑った。

外は日が暮れ初めて、薄暗くなっていた。

「希美さん、連れて行きたい所があるんだ。これから行くね」と優羽。

「ん？どこ？」と聞く希美。

「秘密。じゃ、出発」優羽は車を発車させた。

希美はどこに行くのかと楽しみにした。

車を走らせ、海沿いにきた。さっきよりもだいぶ暗くなっていた。

「わ～綺麗」希美は暗い海に浮かぶたくさんの光を見て言った。

「あ、船だ。安積くん、大きな船があるよ」希美が優羽に言った。
「これからあれに乗るよ」優羽が言った。
「え？本当？…素敵」希美は喜んだ。
優羽は希美が喜んでくれて、嬉しくなった。さっき言わなかったのは、希美をびっくりさせたかったからだった。
船に乗る場所に到着し車から降りた。
目の前には豪華客船がまぶしく光っていた。
希美はびっくりしすぎで船をじっと見て固まっていた。
「希美さん、こっちだよ。優羽が希美の手を引きながら船へ乗り込んだ。
入り口では、タキシードを着た男の人が出迎えた。
「安積様、お待ちしておりました。こちらへどうぞ」と窓際へ案内された。
このタキシードを着た男に会うのは二回目だった。以前ハルに連れられて、この船でナイトクルージングをした事があった。その時ハルは女性と来た事があると言っていた。それはもしかしたら、百合だったのかもしれないと優羽は今になって思った。
「希美さん、気に入ってくれた？」優羽が何もしゃべらなくなった希美に言った。
「…うん、なんかびっくりしちゃって…こんなすごい所」希美が船

内をぐるりと見渡す。
「希美さんと来たかったんだ」優羽は奥二重の優しい目で希美を見つめながら言った。
希美は優羽に見つめられて恥ずかしそうに下を向いた。
「安積様、お料理の方すぐにご用意できますが、いかがいたしますか？」先程のタキシードが優羽に聞いた。
「あぁ、持ってきて」優羽が言った。
「かしこまりました。」タキシードは席を離れて行った。
すぐに料理が運ばれてきた。希美は見るもの見るもの物珍しそうに見ていた。
そして、何度かこれはどうゆうふうに食べるのかと優羽に聞いた。
優羽はその都度丁寧に教えた。
最初は緊張していた希美だが、優羽と話しをしているうちに緊張がほどけたようだった。
二人は料理を楽しみながら、たくさん話しをした。
優羽はちょこちょこ希美を口説いた。
その度に希美は頬を赤く染めた。
そんな希美がとても愛おしいと優羽は思った。
お腹も満たされ、一息ついた所で優羽は話しを切り出した。
「希美さん、話しておきたい事があるんだ」
「なあに？」希美が不安気に優羽を見た。

「俺の仕事の事なんだけど…」優羽は深呼吸してから話しを続けた。
「ホストは女性の相手をする仕事なんだ。仕事とはいえ、接客中は客と恋人関係になったり、抱きしめたり、口説いたりする。そうゆう事を理解した上で俺と付き合わないと、いつか俺は希美さんを悲しませてしまうかもしれない…そんなの…俺は…」優羽は言葉を詰まらせた。

「安積くん、この前、私に好きって言ってくれたよね。私はそれだけで十分。私、安積くんの事信じてる。だから、安積くんの仕事の事には何も口出ししない。全部分かってるつもりだよ」
希美が優羽の事を優しく見つめて言った。

「希美さん…」優羽は希美の考えてた事が、想像していたよりもはるかに上回っていたので、感動した。そして、この話しをする前より、希美の事がもっともっと好きになってしまった。

「ありがとう。俺、希美さんの事本気だから。」優羽は下を向いたまま言った。

希美は優しくほほえんだ。希美は優羽が思ってるよりももっと強い女性だった。

「ねぇ、安積くん、外に出てみない？」
二人は階段を登り、船のデッキへ行った。
風はそんなに吹いていなかった。

「安積くん、さっきはあの道を通ってきたよね？てことは駅はあの辺りかな。」希美が指を指しながら、場所を探していた。
「あれはどこの観覧車かな？」希美は一人事を言っていた。

優羽は後ろから希美を抱きしめた。希美の事が愛おしくてたまらない。

「安積くん…暖かい。」希美が言った。

「暖かいね。」優羽も真似して言った。

「希美」優羽が言った。

「…」さんが付いてないので驚く希美。

「って呼んでもいい？」少し間を置いて言った優羽。

「いいよ。」希美が答えた。

「……」

「優羽」希美が言った。

「…」優羽も名前で呼ばれて驚いた。

「って呼んでもいい？」希美も優羽の真似をしながら言った。

「いいよ」と答える優羽。

優羽は希美を自分の方へ向かせた。

希美は優羽を見て、下を向いた。

優羽は希美のあごを少し上にあげた。

二人は見つめ合った。

そして、キスをした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3447i/

イストワール

2010年10月28日03時46分発行